虐待の世代間連鎖を断ち切った母親の特徴
―妊娠前・妊娠中・出産後に焦点を当てて―

Mother who successfully break free of cyclic generational abuse
―Analyzing their characteristics before, during, and after pregnancy―

ハーン 彩織
Saori Hearn

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：虐待，世代間連鎖，周産期
Key words：Abuse, Cycle of abuse, Perinatal period

1．研究目的

近年の日本社会は，晩産化や核家族化，女性の社会進出や育児の孤立化，地域の繋がりの希薄化により，家庭や地域の中で育児経験を共有することが困難となってきている．また，長時間労働や父親の育児への関わりが不十分な中で，育児への社会的孤立が生みだされ，母親の負担が大きくなってきている．このような背景の中で，児童虐待は生きづらさの現われとして，身体的，精神的，社会的，経済的等の要因が複雑に絡み合って起こると考えられている（厚生労働省）．平成 27 年に実施された厚生労働省による調査では，0 歳～15 歳の子どもがいる人を対象に，『子育てをしていて負担・不安に思う人の割合』が 7 割以上となっている．更に，平成 27 年からは『健やか親子 21（第 2 次）』が開始され，妊娠・出産・育児期における母子保健対策の充実や切れ目のない支援ができる体制作りが目指されている．その中の 2 つの重点課題として，“育てにくさを感じる親に寄り添う支援”と“妊娠期からの児童虐待防止対策”が掲げられている．これらの課題からも，周産期を含めた母親への支援の重要性を知ることができる．また，平成 16 年 2 月に厚生労働省の虐待対策室により施行された，『児童虐待死亡事例の検証と今後の虐待防止対策』についてとりまとめられた調査においても，虐待による死亡事例は 0 歳児の割合が 4 割であり，その背景として，母親が妊娠期から一人で悩みを抱えていることや，産前産後の心身の不調や家庭環境の問題が認められるとしている．更に，令和 2 年に始まった COVID-19 感染拡大（以下，「コロナ渦」）の中で，全国の児童相談所が対応した児童虐待件数は, 20 万 5000 件にのぼり，10 年前に比べて約 3.6 倍となっている（厚生労働省）．コロナ渦による環境の変化で，女性が経済的基盤を失ったことや，外出自粛，一斉休校の影響を受け，家庭の密集性が高まった負の影響として虐待が増加しているといえる．特に，外出自粛の影響は，例年よりも虐待事例が周囲から見え難くなり潜在化していくおそれがあるとされている（斉藤，2021）．

（1）周産期の心について

女性は思春期から始まる生理的な変化，社会や環境との相互作用の中で，子供を育てる心の基盤を養っていく．妊娠が判明すると，いよいよ本格的に母となる心の準備が始まる．身体的には，悪阻や体重の増加から，身体イメージの変化を伴う．心理的には母親としての役割認識やアイデンティティの再形成，親でない頃の自身の喪失や悲観，潜在化されていた人間関係（母親との関係）が表面化されることで生じる葛藤やストレスからくる心理・社会的な不安が認められる（花沢，1977；郷久，1978，平木・柏木，2015）．特に初妊産婦にとっては，それまでのライフスタイルから新しいライフスタイルへ向かっていく役割の移行期である．村井（2002）は，妊娠・産褥期から養育初期にかけて，女性は本当の意味で母親になるとしている．それは母親としての同一性を獲得し，母親役割を達成することを意味する．人生における新しい自己観と役割への移行期には，その人の以前の発達や適応の偏りを含む問題が浮かび出てくる可能性

が高い．そのため，特に初めて母親となる女性にとっての妊娠・産褥期は，発達的危機と考える研究者もいる（Loesch & Greenberg, 1962）．更に，武内（1982）によると，妊娠期は出産後の早期の母子関係を築く重要な時期であり，妊娠中の女性が母親になるプロセスが，女性自身の発達と出産後の母子関係の質に影響を与えるとしている．そのため，妊娠前から妊娠中，出産後に焦点を当て，女性が母親となるプロセスの初期の段階において，何らかの心の変化や気づきが重要になってくると示唆される．更に Christina，et al.（2007）によると，母親が出生前にストレスを抱えていると，育児ストレスを経験する可能性が高く，分娩後の苦悩の危険が高いことを示唆しており，リスクの大きい母親に対して，育児プログラムへの参加を促す努力をしなければならないと示唆している．よって本研究では，困難感を抱える期間を妊娠前，妊娠中，出産後とし，新しい命を抱えている期間やそれ以前の状況を含める．妊娠・産褥期という発達的危機は, 10 ヶ月という限られた時間である．その短い期間は，一人の母親にとって，生物的にも，心理的にも，社会的にも一遍に大きく変化する特別な時間とも言い換えられる．世代間連鎖に至らなかった母親の中には，この時間軸の中でどのような心の変容が起きていたのかに注目する研究とする．

（2）ボンディングについて

赤ちゃんから親へのボンディングの概念は 1960 年代に Rubin により紹介され，1970 年代に Klaus and Kennell により広められた（Kinsey & Hupcey, 2013）．Rubin（1984）は，女性の母性獲得課題のひとつとして，母親は妊娠期から子供とのボンディング形成を獲得することが大切であると述べている．また，Klaus and Kennell（1982）によると，ボンディングとは赤ちゃんと大人の間にみられる相互的愛情を意味するのではなく，子どもに対して一方向性をもった関心や愛情により，いかに関わりあうようになったのかという現象を表す用語として定義されている．北村（2019）は，妊娠期からの胎児ボンディングが産後ボンディングに影響すると指摘している．すなわち，胎児ボンディングをケアしていくことが産後ボンディングに繋がると示唆している．また，産後ボンディングは母親の心理状態とも影響がある．Weisman et al（2010）は，妊娠期間中の胎児へのネガティブ感情が産後の抑うつを予測するとしている．このように子どもと母親との関係性は，出産後のみならず，出産前から赤ちゃんを意識し，ボンディングというかたちで絆を意識した活動がされている．そのため，虐待の連鎖を断ち切った母親において，妊娠前から妊娠中の意識に，何らかの変革があるのかどうかについて探索する意義があると考える．

（3）世代間連鎖についての先行研究

虐待の世代間連鎖とは，親自身が幼少期に受けた虐待を，自分の子どもの養育において繰り返してしまう現象である．Bowlby（1969 : 1973 : 1980）の内的作業モデル（以下，IWM）によると，人間とは養育者との親密な愛着関係の中に，“自分は安全であるという感覚”を絶えず得ようとする本質があり，そのような安全な感覚に支えられてはじめて，健常な心身の発達が可能であると論じている．一方，“自分は安全である”という感覚を幼少期に持つことのできなかった子どもは，自分が親になったとき，わが子に対する虐待を引き起こす背景となり，愛着関係は世代を通じて連鎖していくとしている．Levovici（1988）は，“母親は自分の赤ん坊を育てる際に，その養育に自分自身の内界および対人関係の人的生活をふくめる”としている．周産期の女性の心理状態は，“原初の母性的没頭”と名付けられており（Winnicott,1956），この時期は養育者は妊娠後期から出産後数週にかけて，子どものニーズへの感受性の高まりと共に深く同一化する心理状態であるとしている．

虐待を受けて育った母親は子供の頃に依存欲求を十分に満たされておらず，幼少期に得られなかった感情を自分の子供に求めようとして，役割逆転が生じてしまう（西澤，1994）．我が子が母親の欲求を満たすことができないと，母親はそれを子供からの拒否と感じ，自己防衛的に子供を拒絶してしまうことになる（渡辺，2009）．また，虐待を受けて育つと，暴力に対する親和性が強くなるために暴力的なしつけを繰り返してしまうこともある．児童期に暴力に曝露された女性ほど，出産後に育児に満足感が得にくいとされている（Williams, Taylor, & Schwannauer, 2016）．虐待の経験は，自己評価の低下にもつながり，周囲で起こる出来事を自分の責任と感じてしまうこともある．例えば，泣き止まない子どもに対して，子どもが自分を責めているかのように捉えてしまう傾向もあるとされる（西澤，1994）．このように，虐待を受けた母親は，被害者から加害者になることにより，過去の傷を癒そうとするのである．一方，受容的な養

育経験を持つ母親は，拒絶的な養育経験を持つ母親よりも，より柔軟性のある養育行動をとるとされている（Hammond, Landry, Swanka, Smith, 2000）．

（4）虐待の世代間連鎖のおこる割合について

虐待の世代間連鎖のおこる割合は，研究により多少数値が異なるが，30%から 50%である（西澤，1994；中嶋，2005；Kaufman & Zigler，1987；住田，2010）そのため，虐待はある程度の割合で世代を超えて伝わるものであるといえる．しかし上記のデータは，被虐待経験を持ちながらも，虐待の連鎖に至らなかった親が約 50%いることを意味している．近年，良好とは言えない被養育経験をもちながらも，適応的に我が子に関わることができ，世代間連鎖の影響を受けない母親がいることが報告されている（Hopkins，1990；林，横山，2010；千崎，2018）

（5）被虐待経験が伝達されない要因（親の内省機能について）

被養育経験が伝達されない要因についてはさまざまな先行研究がされている．要因の一つとして，親の内省機能が注目されている．内省機能とは，自己や他者の心的状態から，自分や他者の行動の意味を認知し理解する能力のことである（岡本，2010）．Hopkins（1990）は，不幸な子供時代の関係を繰り返さないためには，大人が自身の過去を受け入れたときに避けることができるとしている．また遠藤（2010）は，世代間連鎖を生じさせない要因と IWM を変容させる要因を検討することの重要性を示しており，その要因の一つとして養育者の内省機能に注目している．更に林・横山（2010）は，虐待を繰り返さなかった親は，自ら親にされた子育てについて振り返る力に長けており，されて嫌だったことを認知し，意識するという内省の力について指摘している．また，西田（2015）は，親の内省機能が及ぼす影響を検討しており，「親自身が不安や焦りから一歩引いて子どもを見る」ことが必要であると述べている．朴・杉村（2009）は，メタ認知やメタ認知モニタリング，内省的注意力を省察という概念として統一し，子育てにおける省察を検討している．省察は子どもの状態の正確な読み取りや他者の観察を可能とする．省察をよく行う親は否定的な内省（自己反芻）と肯定的な内省（自己省察）の両方をよく行い，反芻と省察に折り合いをつけながら育児を行うとしている．

母親の関係性の変化に着目し，内省の機会であると捉えた研究もされている（ダニエルら，2012）．そこでは，出産後の母親の母性が育つにつれ，いままで父・母・子（自分自身）であった三者関係から，母（自分自身）・子・祖母という新たな三者関係が生まれると指摘されている．それは，自分の母性が育つにつれ，実母を一人の人間として見直す機会となることを示唆している．

（6）被虐待経験が伝達されない要因（子ども時代の重要他者の存在について）

二つ目の要因として，子ども時代に親以外の重要他者が存在しているかどうかが挙げられる．Steele（1986）は，被虐待経験を持ちながらも，健康的な社会生活を送れている者の多くは，子ども時代に親の代理となる人物を持つことができていたと指摘している．また Egeland ら（1988）によれば，虐待の連鎖を断ち切ることのできたケースの共通点として，子ども時代に虐待親に代わる他者から愛情をもらっていたこと，情緒的なサポートとしてのパートナー（恋人，夫）の存在があること，あるいはある時点で心理療法を経験し，セラピストとの関係を通じて，自己の IWM の修正に至ることができたこと，が挙げられている．福田（2004）では，ネガティブな被養育経験のある場合でも，子ども時代のポジティブな重要他者の存在により，適切な養育行動ができると述べられている．それに対し，林・横山（2010）は，核家族化した現在の家族形態において重要他者を見つける難しさにふれ，家族の中には子どもとほとんど接したことのない親が作る一世代親子の関係だけが残され，現代の子育ての難しさを指摘している．その上で，今後は多世代家族に代わる人との関わりやコミュニティの存在が重要になってくるであろうと示唆している．更に Milan et al.（2004）は，妊婦を対象とする調査研究において，子ども時代の不適切な養育経験と生まれてきた乳児との関係についてどのように影響するのかを検討している．それによると，妊娠期にある母親自身が，過去に被虐待経験があったとしても，現在の実母やそれに変わる愛着人物との関係性が安定している場合や，自分が母親になることに対して肯定的な感情が持てる妊婦は，被虐待経験が直線的に否定的影響を及ぼさなかったという結果が見出されている．更に，妊娠期から継続的にパートナーからサポートが得られている場合には，虐待の世代間連鎖を抑制する要因として機能することが示唆されている．

（7）被虐待経験が伝達されない要因（社会的なサポートの享受について）

三つ目の要因として，社会的なサポートの享受も重要な役割を果たしている．Kaufman & Zigler（1987）は，虐待経験があったとしても，多くの社会的サポートを受けていれば子どもを虐待する親はほとんどいないとしている．Briere & Jordan（2009）においては，世代間連鎖を促進する要因として貧困や社会的サポートが得られないことを指摘しており，社会的経済要因が関与しているとされている．日本においても，暴力の連鎖を断ち切った母親の研究がされており，その要因として配偶者や兄弟といった身近な人物の他に先生や医師をはじめとする周囲の人や，他機関を利用し相談していることが示唆されている（八木，吉野，苅野，2006）．更に林・横山（2010）においても，幼稚園や児童館といった先生のいる身近な場所での集まりを利用した社会的サポートを利用しやすいことが示された．また，ネガティブな被養育経験の伝達予防においては，日常的に利用しやすい場から徐々に専門家のサポートが得やすくなるような段階的なステップが役立つとされている．妊娠期間中においての社会的サポートの大切さは，青木（2009）や北村（2019）により示されている．周産期において，養育者は乳児への高い感受性と育児への強い動機づけをもっており，母親はストレスに対して敏感な時期におかれている．出産直後の発達早期の段階では，子どもとの相互作用の歪みや，周囲の環境要因がまだ進行していない時期であり，社会的サポートへの反応性や可塑性が高い状態にあると述べている．

２．研究実施内容

ここまで，周産期のこころ，ボンディング，世代間連鎖の先行研究を様々な角度から概観した．

上記で述べた先行研究からは，被養育経験が伝達されない要因として，親自身の内省，親以外の重要他者，社会的サポートの有無は重要な機能であるといえる．それと同時に，いずれの要因においても妊娠前から周産期，養育初期において母親のアイデンティティが変化し母性が育つ過程で，親としての準備は既に始まっているといえ，妊娠初期からのサポートが今後も期待されている．しかしながら，世代間連鎖の研究を概観する中で，多くの研究は出産後に焦点が当てられており，妊娠前の葛藤から時間経過を追うごとに変化する母親の心に着目し，なぜ連鎖に至らなかったのかを探る研究はほとんどみあたらない．そこで本研究では，妊娠前，妊娠中，出産後に焦点をあてて，虐待の世代間連鎖を断ち切った母親の特徴を知ることにより，被虐待児の母親が抱える周産期のこころの動きを理解することとする．

本研究の意義

問題でも述べてきたように，子供の虐待は増加傾向である．虐待発生後の親子関係の修復は不可能ではないが困難であり，被虐待児の心身の発達への影響が大きい．そのため，子どもの虐待予防の重要性が認識されてきている．厚生労働省からは，「支援の必要性を判断する一定の指標（項目の例示）」が定められている．そのなかでも，出産後の子どもの養育について，出産前において支援を行うことが特に必要と認められる，特定妊婦の項目が設けられている．特定妊婦は，妊娠中からハイリスク要因を特定できる妊婦であり，望まない妊娠，経済的問題，妊娠葛藤，母子手帳未発行，妊婦検診未受診，多児，妊婦の心身不調等が挙げられている．本研究の最大の意義として，このような妊娠期間中から分かるハイリスクな母親から，虐待へと繋がる予防に寄与するといえる．

更に，副次的な意義として，被虐待経験をもつが連鎖を止められた母親に対しては，自分のおかれた現状を見つめなおし，連鎖を断ち切れた自分自身について客観視する機会となること．また，虐待の連鎖を止めたいと願っている母親に対しては，今後自分にとって必要な条件を検討することができることであるといえる．最後に，これから母親になろうとする人，子供を持つ事に不安のある人に対して，子供を持つ勇気と環境を含めた示唆を与えられる研究であるといえる．

３．まとめと今後の課題

9 月から虐待の世代間連鎖の実態や周産期においての先行研究について検討し，文献や論文から現状把握に努めた．また，研究の分析方法についても模索した結果，M-GTA を使用することとした．

12 月に倫理申請書提出を終え，それと同時に被験者募集の際の書式やインタビューガイドの作成を終えた．

1 月の審査で倫理が通過し，3 月の学内構想発表会にて発表した．その際，教員から研究や募集についてのアドバイスを頂いたため，今後の研究に反映させるために努めた．

構想発表会終了後から，いよいよ被験者の募集について指導教員と相談し，開始する予定である．

今後の課題については，募集した被験者に対して丁寧にインタビューを開始し，そこから分析を開始する予定となっている．

４．この助成による発表論文等

ハーン彩織，虐待の世代間連鎖を断ち切った母親の特徴－妊娠前・妊娠中・妊娠後に焦点をあてー，大妻女子大学大学院修士論文の構想発表会，2023年3月9日，Zoom 開催

主な参考文献

雑誌論文

[1]朴信永，杉村伸一郎．子育てにおける親の内省モデルの検討．広島大学大学院教育学研究紀要，**55**,（2006）, 373-381.

[2]林裕美，横山恭子．ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒反応性を示す母親の特性について：負の世代 間連鎖を断ち切るために．上智大学心理学年報，**34**,（2010）, 33-42.

図書

[1] 青木紀久代．親のメンタルヘルス―新たな子育て時代を生き抜く．ぎょうせい,（1994）.209.

[2] 北村俊則．周産期ボンディングとボンディング障害－子どもを愛せない親たち．ミネルヴァ書房．（2019）. 164.

[3] 木下康仁．ライブ講義 M-GTA－実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて．弘文堂．（2007）. 310.

[4] ダニエル・N・スターン，ナディア・B－スターン，アリソン・フリーランド．母親になるということ 新しい「私」の誕生．創元社．（2012）. 149.

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所令和4度大学院生研究助成（B）（課題番号 DB2230）「被虐待経験のある成人における子供を産むことへの葛藤と EFT プロセスモデルでの検証」を受けたものです．

This work was supported by Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University (Grant Number DB2230).